

OKoTaC 通信

オコタック

2015年10月30日発行

NO.25



↑「多文化にふれる えほんのひろば 2015」
(10/17,18開催)より最新画像
～詳しくは次号でご報告します～

P 2 NPO活動紹介

『外国人家族のための高校進学説明・相談会』を開催します

P 3 多文化な子ども@大阪 のニュース

『第6回中学生多言語スピーチコンテスト』『大阪市多文化進路ガイダンス』

P 4 大阪府立高校の特別枠校紹介⑥

『布施北高等学校』(東大阪市)

P 5 Air Mail メキシコ便り②

『サカテカス』

P 6 みんなの日本語、みんなで NIHONGO ! ⑤

『わかります』

P 7 特別寄稿

『「定住外国人子ども奨学金」(兵庫)の活動紹介』①

P 8 イベント情報





おおさかこども多文化センター 活動紹介

～おおさかこども多文化センターの主催イベントです

『外国人家族のための高校進学説明・相談会』

(大阪府福祉基金地域福祉振興助成事業)

毎年秋に、大阪府内8カ所で行われる大阪府教委主催の多言語進路ガイダンス(8ページ参照)に参加できなかったり、開催の情報が届いていなかった人、あるいはもう一度説明を聞きたいという人たちを対象に、オコタックとしては初めての試み「外国人家族のための高校進学説明・相談会」を11月14日に開催いたします。



日頃、教育サポーターとして小・中学校の保護者懇談の通訳として関わっていますが、その際には、いろいろなことに気づかされます。そのひとつは、子どもの日本語上達に反比例するかのように母語が失われていき、家庭で十分なコミュニケーションがとれていない親子が少なくないことです。また、日本の学校経験のない親と日本の学校しか知らない子どもとの文化・情報ギャップに愕然とすることもありました。そして、子どもが義務教育を終え、いざ高校進学を前にしたときに、子どもの進路選択で親子の葛藤が表面化するものもさまざま見てきました。

このような経験から、日本の高校進学を経験したことがないため、入試制度や費用、高校生活についてよくわからないという外国人家族向けの、高校進学ガイダンスと個別相談会を企画しました。みなさんどうぞ誘い合わせておいください。

(おおさかこども多文化センター理事長 村上自子)

【日 時】 2015年11月14日(土) 14:00～16:30 (受付13:30～)

【場 所】 大阪市立市民交流センター なにわ <http://kouryuu-naniwa.com/access.html>

(JR芦原橋より西へ100m 大阪市浪速区浪速西1-3-10)

【参加費】 無料(だれでも参加できます。申し込みも不要です)

【内 容】 大阪府の高校とはどのような学校なのか、入学するにはどのようにすればよいのか? 府立高校、私立高校について、高校でかかる費用(お金)や日本の教育システムについて説明します。

※ 個別教育相談会もあります。

※ 中国語、英語の通訳あり

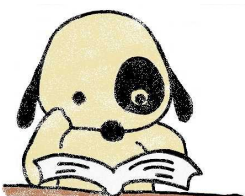
(そのほかの言語も対応できる場合があります。11月3日までに問い合わせてください)

【対象者】 日本語を母語としない家族、学校教員、地域の支援者

【参加申込】 NPO法人おおさかこども多文化センター(主催)

※ 子どもの名前、学校名、年齢、参加人数、言語、及び通訳の必要な人は言語名を記入の上、11月7日(土)までにFaxまたはMailにて申し込んでください。

Fax: 06-6586-9477 Mail: osakakodomo@gmail.com





「第6回中学生多言語スピーチコンテスト」(8月30日開催)

主催:(公財)八尾市国際交流センター

当国際交流センターでは、毎年中学生を対象にスピーチコンテストを開催しています。コンテストは、英語部門と多言語部門があり、世界には英語だけでなく多くの言語が存在し、日本にもさまざまな言語を話す人たちが住んでいることを知ってほしい、そして、それぞれのことばに耳を傾けてほしい、という目的で、2部門の構成で開催しています。

今年は26人の応募があり、事前審査を通過した20人の中学生が本選に出場しました。テーマは「忘れられない出来事」。英語、中国語、ベトナム語で、それぞれが自分の思いを素直に表現していました。大きな会場で緊張する中、日頃の練習の成果を発揮すべく、一生懸命それぞれの思いを伝えていました。大切な友人や先生、家族のこと、辛かったことやワクワクした経験、周りの人たちへの感謝の気持ちなど、中学生一人ひとりが、今までの経験の中で伝えたいと思ったことを、とても素直に堂々とスピーチしている姿に、応援に来ている人たちをはじめとして、来聴者の多くの人たちは胸を打たれていました。また、ふらっと覗きに來られた方も、途中で席を立つのを忘れるくらい、エネルギッシュな中学生の姿に感動されていました。



中学生が全力で取り組み、挑戦しているスピーチコンテスト。たくさんの方々に支えられ、毎年開催していますが、これからも多くの中学生が参加し、そして多くの人たちに中学生の思いを伝えていければと思っています。
(公財)八尾市国際交流センター 能勢靖子

「大阪市多文化進路ガイダンス」



各校のブースで相談

9月27日(日)国際交流センターで、大阪市多文化進路ガイダンスが行われました。このガイダンスは大阪市外教を中心に、府立外教、帰国した子どもの教育センター校担当者、多文化共生センター大阪、国際交流センターが実行委員会を作り、大阪市教育委員会と協力して行っています。

大阪市では毎年2回の進路ガイダンスを実施しています。7月の第1回目のガイダンスでは、特別枠など進路の概要について説明をし、9月の第2回目では高校ごとのブースに分かれて、個別相談を行いました。今回も約50名の生徒が参加し、保護者や中学校の先生と一緒に熱心に高校の先生に話を聞いていました。また「なんでも相談コーナー」を設けていますが、受験資格や進路選択の疑問など様々な相談があり、来日した経過や年数などそれぞれ違う背景を持った生徒たちに対して、細やかな対応が必要であると感じました。

また年々受験する人数や国籍、言語が増えてきていますが、今の体制ではこの子どもたちが中学校を卒業して、さらに教育を受ける機会を保障できなくなるのではという危惧があります。渡日した子どもたちが、日本の社会で活躍できる人材として生かされる制度の拡大を望みます。
(R. Y)



大阪府立高校の特別枠校紹介⑥

～ 布施北高等学校 ～

布施北高校は、東大阪市にある学校です。

最寄り駅は近鉄けいはんな線の荒本駅で、大阪市内からもアクセスがよく通学しやすい場所にあります。

布施北高校の大きな特徴は、国(政府)も評価し、2011(平成 22)年に文部科学大臣賞に輝いている「デュアルシステム」です。これは、学校での授業だけではなく、職場体験しながら、社会で生き抜く力をつけるシステムです。2年次より週に1回決まった曜日に、丸1日、企業や施設で実習をするというものです。実習先は、工場やお店、保育所・幼稚園、介護施設など、いろいろです。



前期入試でその「デュアル総合学科」と「中国等帰国生徒及び外国人生徒入学者選抜」で渡日生徒を募集しています。渡日生徒は出願の際に「デュアル総合学科」か「普通科」を選択することになっており、後期入試では従来の普通科で生徒を募集しています。一般枠で入学した生徒にも、外国にルーツのある生徒が多数在籍しています。

布施北高校は、2005(平成 17)年より「中国等帰国生徒及び外国人生徒入学者選抜」を実施しており、今年で11年目になります。この入試で入学した生徒は、中国の生徒が一番多いのですが、台湾、ベトナム、フィリピン、タイ、ペルー、アフガニスタン、パキスタンなどさまざまな国と地域から来ています。

この入試で入学した生徒は1年生のうち、抽出授業を多く実施し、体育や芸術などの実技教科以外はほとんどの科目をクラスとは別の教室で授業を受けます。その中には日本語を勉強する時間もあります。

放課後は、「日本語能力試験」をめざして勉強に励む生徒もいます。また、「中国文化研究部」というクラブがあり、学校の文化祭や校外での様々な行事で、伝統文化である舞踊や楽器演奏を披露したり、大阪府の外国にルーツのある高校生を対象としたスピーチコンテストや作文コンテスト、交流会にも出場・参加しています。



人権文化発表交流会

この特別な入試で入学した生徒たちの卒業後の進路は様々で、複数の言語と文化をもっていることを活かし、大学の国際関係の学科に進学した生徒をはじめとして、多くの生徒がいろいろな大学・短大や専門学校に進学していきます。また、さまざまな企業等に就職試験を受けて合格し、正社員として就職していく生徒もいます。

学校説明会は随時行っていますので、いつでも学校へお電話いただけたいと思います。

〒577-0024 東大阪市荒本西 1-2-72 TEL 06-6787-2666

(府立布施北高等学校 在日外国人教育担当:荒木 聖加)



メキシコ便り② 「サカテカス」

(おおさかこども多文化センター会員・金野広美)

踏んだりけったりを経験をしたチワワからバスで南に 12 時間、中央高原北西部にあるサカテカスに着きました。ここは 16 世紀にメキシコ随一の銀鉱として栄えたところで、当時の貴族が富をつぎ込んだ壮麗なバロック建築がそのまま残っているところです。古い石畳の道や小さな噴水のある広場がいたるところにあり、バロック建築のチュリゲラ様式と呼ばれる緻密な装飾がほどこされたカテドラルやサント・ドミンゴ教会がそびえています。そんなサカテカスの街並みを一望できるというゴーフアの丘に登ってみました。さわやかな風にふかれながら展望台から眺めるサカテカスは、かわいらしい箱庭のようで、平和そのもののように眼下にひろがっていました。このあたりで



ゴーフアの丘から望むサカテカスの街

採れる砂岩は赤みがかった色をしていて、その石でつくられた建物は全体に濃い桃色をしているため、ピンクシティという愛称もあるほどです。この丘はいまでこそサカテカスのビュースポットになっている場所ですが、1914 年、連邦政府軍とパンチョ・ビージャ率いる革命軍によって激闘が繰り広げられ、革命軍の勝利によりメキシコに新しい時代が到来する契機になった場所でもあります。この時の戦闘の様子などを当時の武器や写真などで知ることができるサカテカス占拠博物館を訪れ、多くの生々しい戦いの記録を見ました。まだあどけない顔をした若い娘が肩から銃弾のぎゅっしり詰まったベルトをかけ、銃を持って少し緊張しつつ、わずかに微笑んでいるかのような表情の写真がとても印象的でした。きっと彼女はとて

も怖かったでしょうが、誇りを持って戦いに参加したのではないかと思わせる 1 枚でした。

博物館を出たあと、下りは別のルートで帰ろうと、客待ちをしていたタクシーに乗りました。タクシーだと 15 分 40 ペソ(約 400 円)の距離なのですが、陽気におしゃべりしていた運転手が、なんと途中で知り合いの女性を見つけて助手席に乗せました。そしてなにやら彼女と楽しそうに話し出したのです。私はちょっとびっくりしてしまい、「相乗りは料金頭割りやでー」と大阪のおばちゃんになろうかと思いましたが、200 円くらいのことなので、まあいいかと、ここは我慢して寛大な日本人でいましたが、日本ではちょっと考えられないことですね。

ここサカテカスには個人のコレクションとは思えないくらい中身の充実しているといわれるふたつの博物館があります。ひとつはペドロ・コロネル博物館で、サカテカス出身の画家ペドロ・コロネルの収集品を展示してあります。エジプトのミイラ、中国清王朝の青磁器、ギリシャの彫像、インドの神像、アフリカの木彫品、ピカソ、シャガール、ミロ、ゴヤ、日本の浮世絵と、その数も種類も半端ではありません。ミロなど「UBU の子どもたち」という一連の作品をはじめとして約 60 点、浮世絵も歌麿呂や豊国など約 40 点ありました。

次に仮面博物館とみんなが呼んでいるラファエル・コロネル博物館に行きました。メキシコの伝統的な宗教儀式や祭りのダンスに使われる鹿、ジャガー、牛などの動物、老人や子ども、スペインのコンキスタドル(征服者)、またこれ以上気持ち悪くできないといった角を持った悪魔の仮面など、さまざまな仮面が約 3500 点展示してあります。日本でも能面や鬼面など多くの仮面がありますが、ここの仮面たちの派手派手しさに比べれば、日本のものはとても簡素で美しいと思いました。1メートルはある大きな悪魔の仮面など、恐ろしくしようと蛇や狼などをいろいろとつけすぎて、かえって滑稽になってしまい、日本の夜叉面の方がよほど恐ろしいのではないかと思われました。仮面は簡単に変身できる手軽な小道具で、とても興味深かったのですが、なにせ 3500 個もあるのですから行けども行けども仮面ばかり、お客は私ひとり、歩いているうちにジャガーや大きな牛、おぞましい悪魔が突然動き出し、襲いかかるのではないかという気がしてきて、だんだん怖くなってきました。そしてどんどん早足になり、最後は小走りで行けず、展示室を出てしまいました。



みんなの日本語、みんなで NIHONGO ! ⑤

宮崎由梨(おおさかこども多文化センター 会員・日本語教師)

【エピソード5】 わかります

日本語教師1年目、タイの教育機関で働いていたころのことです。学生に何か助言をしたり注意をしたりしたときに、このことばが返ってきました。はじめのうちはちょっとムツとしてしまったものですが、この「わかります」ということば、学生は「わかりました」のつもりで使っているということに気づきました。

【会話Ⅰ】

A : 約束の時間に遅れるときは、必ず連絡してくださいね。

B : はい、わかります。

【会話Ⅱ】

A : 約束の時間に遅れるときは、必ず連絡してくださいね。

B : はい、わかりました。

「ます」と「ました」を変えるだけでこの違い！会話Ⅰと会話Ⅱでは B さんの返答の意図が全く違ったものになっています。会話Ⅰは、まるで「わかってるのに、いちいちうるさいなあ」と言わんばかりの言い種にも聞こえてしまい、A さんが B さんに対して抱く感情については言うまでもないでしょう。誤用であれば、B さんは知らず知らずのうちに自分の印象を悪くしてしまうこととなります。これに気がついてからは、ムツとすることなく「「わかりました」ですよ」と優しく教えてあげられるようになりました。

ここで、タイの日本語教師が経験しがちな会話をもう一つ…。

【会話Ⅲ】

A : もうごはんを食べましたか。

B : いいえ、まだです。

A : そうですか。



Aは学生で、Bは教師です。この会話、なんだか違和感がありませんか。実は「もうごはんを食べましたか」はタイではよく使われる挨拶の一つです。初級で『もう～ましたか』を習った学生は、にこにこしながらこう声をかけてくれます。ところがそのまま日本語にされると、食事のお誘いの前置きのように感じられ、このあとには「一緒に食べませんか」と言ってくれるものと期待をしてしまいます。「いいえ、まだです」と言いながら、心の中では「何を食べに行こうかな」とか「今日は急いでいるから一人で食べたいのにな…」などと考えを巡らせているうちに、「そうですか」で終わったり、微笑みを返されて終わったりして、なんだか拍子抜けしてしまうことが続きました。あるときこの複雑な胸の内を学生たちに伝えてみると、驚きと笑いが起こり、私の戸惑いは学生たちにとっては思いもよらないことだったのだと判かりました。

学習者と話をしていると、「ん？」と思う表現に出会うことがたびたびあります。一見文法的な間違いがないように思えても誤用が潜んでいたり、話し手の文化の影響を受けた独特の“語用”だったりする可能性もありますから、そんなときは立ち止まって考えてみるようにしています。ささいな『ごよう』の問題も人間関係を築く上で大切なのだと実感するとともに、それらを通して見えてくる、日本語に関する新たな発見や話し手の文化の一端が楽しみでもあります。

特別寄稿 「定住外国人子ども奨学金」(兵庫)の活動紹介 ①



山本晃輔(大阪大学特任助教、おおさかこども多文化センター会員)

【編集部より】2007年、神戸で外国にルーツをもつ子どもを対象とする奨学金「定住外国人子ども奨学金」が誕生しました。年間3人、月額1万5,000円の返還不要の奨学金です。現在8期生を数え、その活動は着実な歩みを残しています。この奨学金設立に深く関わってこられた山本さんに、これから3回にわたって、その活動を紹介していただきます。

★ ★ ★

阪神淡路大震災以降の神戸では「多文化共生」の名のもとで、さまざまな外国人支援活動が花開く。母語教室、放課後学習会や居場所づくりなど、子どもたちを対象とする活動も続けられてきた。県や市も「多文化共生」を全面に押し出し、先進地域としてのアピールを行っている。そうした最中、2007年6月17日、神戸新聞に「県内外国人進学率50%」を見出しとする記事が掲載された。この数字はその後さまざまな検証を呼ぶことになるものの、日本人の高校進学率が95%前後を推移していることをふまえれば、「50%」という数字がもつインパクトは計り知れないものがあった。

一般的に、公立学校への進学は、学力試験による選抜を通じて行われる。そして、日本では学力試験による選抜を「個人の努力」として見る向きがある。学力試験はこれまでの「努力」を測定し、進学先を振り分けるための「平等」なシステムであるというのだ。それゆえ、いかなる社会的なハンディキャップを有していても、基本的には学力試験の受験が求められる。

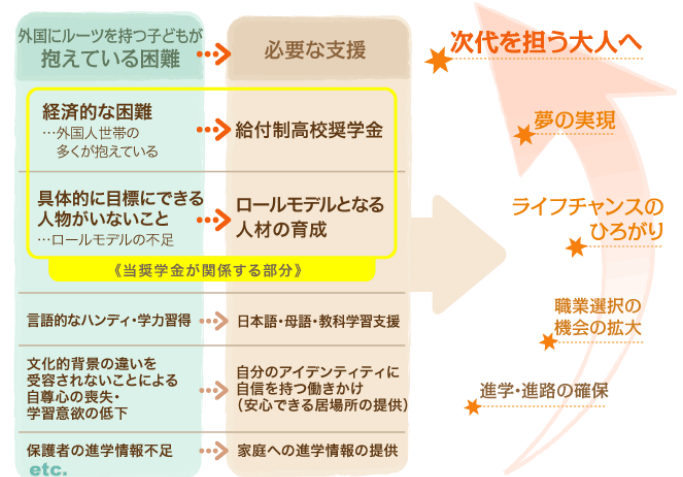
高校進学は中学校を経由して行われるが、「進路選択」は学校と子どもたち・親のプライベートな課題であり、多くの支援者にとって直接的な介入が難しい。そこで、学力の充足や進路へのアドバイスといった「支援」が当面の課題となってきた。しかし、活動を充実させてもなお「進学率50%」という現実はあまりに重いものである。この「進学率50%」に向きあうことから「定住外国人子ども奨学金」の活動が発足した。声を発したのが、神戸長田区で外国にルーツをもつ子どもたちを対象とする学習支援をおこなってきたNPO法人神戸定住外国人支援センター(KFC)と、その活動の支援者たちである。

ではなぜ「奨学金」なのであろうか。

進学意欲を表現する際には「温度」の比喩が用いられる。学習支援の現場では、子どもたちの進学意欲を「暖める」ことに苦心することがある。「なぜ高校進学なのか?」「働いたほうがお金になる」といった子どもたちの訴えは、時に将来への諦めから発せられる。とりわけ、経済的な苦しさ、将来展望となりえるロールモデルの不在は、その諦めを確固たるものとしがちである。一部の外国人の子どもたちの進学意欲は「冷えきった」状況にあった。こうした子どもたちの意欲を「暖める」ためには、言語的・学力的な下支えや保護者への情報提供といった支援策だけでなく、直接的な「経済的な困窮」の解消とロールモデル人材の育成による「モデル」の提示が重要となる。そのコンセプトは「育英会奨学金」や「朝鮮奨学会」などとも共通したものである。そこでKFCを中心に、2007年に有志による定住外国人子ども実行委員会を設立、月額1万5,000円の返還不要の奨学金を年間3人に支給することを基本に活動が始まった。しかし経済的な基盤があるわけでもなく、原資もない現状において、その活動にはさまざまな困難が待ち受けていた。

→次回は、実際の事業内容や奨学生の様子についてご報告します。

定住外国人子ども奨学金 (<http://www.social-b.net/kfc/scholarship/>)



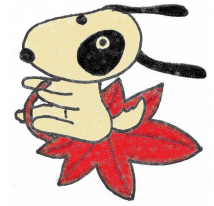


イベント情報

『多言語進路ガイダンス』 渡日中学生・保護者対象(大阪府教育委員会主催)

渡日の中学生が府立高校に進学する際に必要な情報や説明を受けることができます。10月を中心に、すでに大阪府内各地区で実施されていますが、11月以降の予定を紹介します。

地区	開催日	時間	会場
三島	11月7日(土)	13:30~	吹田市立千里市民センター
中河内	11月5日(木)	19:00~	八尾市役所
	12月12日(土)	14:00~	東大阪市立縄手小学校



内容

- (1) 高校入試制度等の説明
- (2) 高校紹介
- (3) 先輩の体験談
- (4) 個別進路相談
- (5) その他

この表の日時は予定です。

参加する場合、あるいは予備日などについては、必ず下記の機関に問い合わせてください。

在住地区の教育委員会、あるいは大阪府教育委員会事務局
市町村教育室小中学校課 06-6941-0351

ちょっと
ひといき

ことばっておもしろい♪

同音異義語 スペイン語編

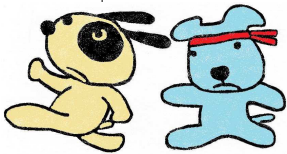
日本で有名な、一休さんのとんち話に「このはしをわたるな」と書かれていた橋を一休さんが悠々と真ん中を通り、涼しい顔で「端を渡らず、真ん中を渡りました」と答えるという話があります。この様に日本では同じ音で意味の異なる言葉が多くありますが、これがスペイン語と日本語のあいだでもあるのです。

例えば馬鹿と阿呆、これは vaca (バカ) = 牝牛、ajo (アホ) = ニンニクとなります。また天井とそば粉は、tendón (腱)、sobaco (わきの下) となります。これはスペイン語と日本語の母音が同じためにみられる現象です。

そこで、このことをうまく利用すれば、スペイン語の単語が簡単に覚えられます。例えば「居酒屋では食べるな」、居酒屋はスペイン語では taberna (タベルナ) です。また、

「イカの足がからまる」、イカはスペイン語で calamar (カラマール)。「白いブランコ」、白いはスペイン語で blanco (ブランコ)。「アボガドを食べる弁護士」、弁護士はスペイン語で abogado (アボガド)。どうです。どんどん作れてしまうでしょう。

これでみなさんにもスペイン語に親しみを感じてもらえるとうれしな。(H.K)



NPO 法人 おおさか子ども多文化センター

代表 村上 自子

〒550-0005 大阪市西区西本町 1-7-7 CE 西本町ビル 8 階

Tel / Fax 06-6586-9477

E-mail osakakodomo@gmail.com

URL <http://okotac.org>

郵便振替 【記号・番号】00940-1-272824

(他金融機関からは【店名】〇九九(セキウキウ))

【店番】099【預金種目】当座【口座番号】0272824)

口座名義『NPO法人 おおさか子ども多文化センター』
(フリガナ: トクヒ) オオサカコドモタブンカセンター

